

自己主張と自己抑制

—乳幼児期における保育のあり方—

木野本 はるみ

Self-Confidence and Self-Control

—How to Raise and Educate the Infants when they Are So Young—

Harumi KINOMOTO

It would be the most important practice that we should raise and educate the infants by giving them "Self-control" discipline, both of which seems to be very inconsistent between them.

"Self-confidence" creates the infants how to think and act by themselves and how to be independent from others, especially from their parents and friends. On the other hands, "self-control" gives them the kinder considerations to others by forcing them to control "Me-first" sentiments of them.

To teach and give the infants the discipline that "Right thing is right, and wrong thing is wrong" is essential for them to be good citizens. Thus, in this study, I discuss the "Self-confidence" and "Self-control" disciplines for raising and educating in the earlier stage of the infants.

はじめに

近年、協調性・思いやり・礼儀正しさ・我慢強さ・従順など、自己抑制的であると特徴づけられてきた日本の子供の社会性に赤信号が点っている。青少年を中心とする若年層に、学級崩壊・いじめ・校内暴力、「キレる現象」、公共の場面での傍若無人振舞いなど、目に余る行動が目立ってきている。

急速な少子・高齢化社会の進展により、大人が自分自身の行動を省みて子どもと真剣に向き合い、時にはきちんと叱ることが少なくなった。このような『ことなかれ主義』的な傾向が強

まっている社会において、悲惨な児童虐待や少年犯罪の発生が後をたたない。これらの現象は、乳幼児期における保育のあり方に起因することが多い。一般に、親は乳幼児期の子どもの身体的健康面には注意を注ぐが、子どもの成長発達段階に応じた内面的保育を軽視しがちな傾向がある。この幼児期には、『自己主張』・『自己抑制』を育むことが必要である。広辞苑によると、『主張』とは「自分の説を強く言い張る」とある。『抑制』とは、「抑えとどめること。精神的・生理的な機能が他の機能を押しさえつけ、その実現を妨げること」と記されている。対人関係における『自己主張・実現』は、「自分の欲求や意思を他人や集団の前で表現し、実現すること」であり、『自己抑制』は、「自分の欲求や行動を制すべき時に抑えること」である。この二つをバランスよく保育することは難しい。この時期の子どもが『自己主張』・『自己抑制』ができることは、将来その子どもの人格形成に大きく関わっていくのである。

中央教育審議会も、『家庭教育の回復』をその理念として掲げている。女性の社会進出により、就労と育児を両立させるために、親にとって子どもをきちんと育てることに大きなエネルギーを費やす。忙しさの余り、時として親は保育を怠り、わが子への愛情を『お金』・『もの』に代えるといった状況が多く見られる等、現代の育児における大きな問題が浮上してきている。一方、少子化による親の過干渉が子どもの『自己主張』と『自己抑制』のバランスを崩している。

本稿では、『自己主張』と『自己抑制』のできる子どもを育てることが可能な保育環境づくり、親・保育者等の子どもを取り巻く大人の関わり方を研究主題とし、これからの新しい乳幼児保育の方向性について若干の考察を行いたい。

1. 乳幼児教育のあり方

社会には、『変わるもの』・『変わるべきもの』、『変わらないもの』・『変わってはいけないもの』がある。乳幼児教育においても、このことは当てはまるのではないか。児童福祉法第一章総則第一条の『児童福祉法の理念』に、「すべて国民は、児童が心身共に健やかに生まれ、かつ育成されなければならない。すべて児童は等しくその生活を保障され、愛護されなければならない。」とある。最近、3歳児までは母親が子育てをしないと、子どもの将来が歪んだり悪影響をもたらすという、わが国において古くから言い伝えられてきた子育てに対する考え方（いわゆる『3歳児神話』）が話題となってきている。働きながら子育てをする母親の割合が増加し、0歳から2歳までの保育所待機児童等の問題がクローズアップされるなど、子どもの発達への影響を危惧する声が高まっている。その背景には、就労と育児の両面支援が必要であるにも関わらず、社会的な条件整備が立ち遅れているという実情がある。これが、前述の『3歳児神話』に注目が集まるゆえんである。しかし、子どもを預かる施設（保育所等）における保育の現状は、乳幼児に十分な愛情と発達刺激を与えることが可能な保育環境が十分整備されているとは言えない状況にある。行政サイドもこの状況に注目し、各種施策を打ち出しつつある。具体的な事例として、厚生労働省の『短時間正社員制度』¹が挙げられる。ワークシェアリングのひとつとして大いに推進してほしい施策である。

次に、過去における乳幼児教育に関する先学の考えについて、その著作等の一部から挙げ、考察してみたい。D. カーネギーは、著書『人を動かす』の中で子育ての重要なキーワードとして「子どもに対して重要感を持たせることである」と述べている²。また、「人間は問題があってその心が奪われている以外は、大抵自分のことばかり考えて暮らしている。他人の真価を認めようと努めるのは、日常生活では欠くことのできない大切な心掛けであるが、ついおろそかになりがちである。子どもが学校からよい成績をもらって帰ってきてても、ほめてやることを怠り、またいろいろのことをした時も励ましのことばをかけてやることも、なかなかしない。子どもにとって、親が示してくれる関心や賞賛のことば程嬉しいものはないのである。」と述べている。また、山本七平は『論語の読み方』の冒頭で、「教育問題はさまざまな形で戦後一貫して論じられてきた。教育の専門家に『教育とは何か』と質問すると、判で捺したように『教育とは知育・徳育・体育で、いわば知・徳・体の健全な発育をめざすものである』という。そこで問題なのは、知育とか体育はテストという方法で計ることができる。しかし、徳育はどのようにその成果を見るか。徳育の必要は誰もが主張し、それがなければ世の中は完全に無規範となり、崩壊してしまう。この重要な徳育を『こころの教育』として如何に明確にしていくことが問題である。」と指摘している³。福澤諭吉は『学問ノススメ』の中で、世話をする意味について次のように述べている。「世話という語には、『保護』と『命令』の二つの意味がある。『保護』とは、人の傍らに付き添って金や物を与え時間をさいて利益や名誉を守ってやること。『命令』とは、人のために役立つことを指図して、心を尽くして忠告することを言う。この両方を備えるのが真の世話であり、子育ての根元である。」⁴

幼稚園教育要領⁵では、保育内容として5つの領域があげられており、『ねらい』と『内容』に分けて示されている。『ねらい』とは、幼稚園入園から修了までの幼児の内面に育つことが期待される心情・意欲・態度などである。『内容』とは、『ねらい』を効果的に達成するため保育者が行い、さらにこの『ねらい』と『内容』は幼児の発達の様々な側面から『健康』・『人間関係』・『環境』・『ことば』・『表現』の5領域にまとめられている。『人間関係』の領域では、「他の人と親しみ、支え合って生活するために自立心を育て人に関わる力を養う観点から示したものである。」⁶としている。これは、子どもの自立心を育て、人と親しみ、関わる気持ちや行動力を養うことを目指しているのである。子どもは、生まれた時点から人々との関わりの中で育てられ、自らも人と関わりながら人間として成長していく。人間関係について問題視されていることは、様々な社会状況の変化による人間関係の希薄化である。その原因として、核家族化や就労形態の変化、子ども集団の減少、遊び場の不足などがあげられる。子どもの身近な環境の状況ひとつを取り上げてみても、家族間でのこころの交流の欠如、隣近所のつき合いへの煩わしさや、トラブルを回避する等の状況がある。周りの親・保育者等の大人たちの心のありように問題があると言えるのではないか。

人間関係領域の『ねらい』は—

- ① 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。

- ② 進んで身近な人と関わり，愛情や信頼感をもつ。
 - ③ 社会生活における望ましい習慣や態度を身につける。
- などである。

①のねらいは，自立行動を身につけることである。杉本は，自立と社会性の発達について「乳幼児期に形成された母子の愛着（アタッチメント）→母親を探索基地として離れていく行動→母親が立ち去っても母親の様子をイメージでき，母子分離が徐々に進行する（分離不安の克服には信頼感が不可欠）→しつけの開始による対立→自己主張・反抗・自我の目覚め→併行して同年代の子どもに興味を示す→取り合い・けんかなどの攻撃的行動→思いやりのこころの芽生え（あたたかく周囲に受け入れられていることを基盤に）→子ども同士の遊び場の発達→役割の分化と自己抑制→精一杯遊ぶことから自己の存在の充実感，自己実現の体験」⁷と記述している。子どもたちは，以上のような経過を辿って自立した社会化を遂げていくのである。これらは，望ましい人間関係が保てるようになるということ自らしようとする内面からの欲求に支えられて発達していくものである。

②のねらいは，身近な人との関わりについてである。自己と他，個と集団の調和という，幼児にとって難しい課題が含まれている。自己発揮と自己抑制のバランスがうまくとれるように，保育者は一人ひとりの特性に即して指導していくことが要求される。

③のねらいは，社会生活の望ましい習慣・態度の形成について，園という集団生活を経験する中で，他を受け入れたり共同生活に必要な心遣いやマナーを身につけていくことであり，ひいては社会生活に必要なルールを理解し，自らがそれに沿った行動がとれるようにしていくことを目指すものである。それにより，友だちと触れ合うことの楽しさが子どもの内面に育ってくるのである。

これら保育の柱となるものは，子ども自身の『自己主張』と『自己抑制』の育み方につける。

2. 母親にとって『よい子』のイメージとは

最近，育児不安に陥っている母親が非常に多いといわれている。その原因は，母親の描く『よい子』のイメージが誤って捉えられていて，日常の育児をしていく中での現実とのギャップが大きいからではないか。例えば，母親に「よいことはどんな子をいうか」を尋ねた調査の回答を分類すると次のようになる。

- ① 親や教師の言うことを素直にきく子
- ② 人に優しい子 先生の言うことをよくきく子
- ③ 感情がよく，大人の言うことを忠実に守る子
- ④ 先生や親の言うことをよくきく子
- ⑤ 大人の言うことをよくきいて脱線しない子
- ⑥ 頭がよくて，性格の穏やかな子
- ⑦ まじめな子

このように、母親にとっては判で捺したように「親や教師のいうことをよくきく子が『よい子』というイメージがある。きょうだい喧嘩をよくする子、人見知りをする子等は母親の『よい子』のイメージから外れている。このような子どもの行動は、発達段階で現れる当然の過程であり、けんかや人見知りをする子どもを『わるい子』とするのは全くの誤りなのである。

3. けんか・いたずら・反抗期

(1) けんかについて

子どものけんかは、2歳ごろから物の占有を巡る自己主張から始まって来る。この時期の自発性の現れはいわゆる『第一反抗期』であり、言語的に自己主張ができる段階である。自己主張が強いので、自分の思うようにならないと、噛みついたり引掻いたりするなどのけんかが始まる。親や保育者は、けんかは悪いことだという、ある意味で一面的な捉え方をする。しかし、けんかは個々の自己主張のぶつかり合いであるから、それに伴う障害を予防することはあっても、「けんかはダメ」などと一方的に規制することは避けなければならない。子どものけんかに大人が介入し一方的な判断による裁定や叱責を行うことにより、当事者である子どもが不満を残す結果になったり、相手の子どもに更なる敵意を抱いたりすることがある。このように誤った大人の介入は、結果的に子どもの心を傷つけることとなったり、お互いに不毛なけんかの新たな火種となることが多い。

少子化社会である現在、子どもたちにはきょうだいげんかを始めとして、『けんか』体験が極めて少ない状況下にある。幼い頃から、きょうだい・友だちなど身近な存在と『けんか』の体験を繰り返すことで互いの『自主性』の発達を促し、『思いやり』のところが芽生えてくるのである。子どもはこのような過程を繰り返し、自分と相手の考え方や行動の仕方との相違を体験し学び、結果として良好な対人関係を保持するために必要な基礎を築くのである。

その後、子どもたちの『けんか』は様々な形態をとるものの、最終的には自分の意見を明確に表明し意見の異なる相手とは互いの意見を交わす過程で新たなアイデアを創造する能力を獲得していくといわれている。いわゆる『口げんか』で、4歳頃に現れ始める現象である。

一方、けんかをしない子どもについては、自主性の発達の遅れを感じる。自己主張・挑戦することへの意欲に乏しい子どもである。このような状況は、自分なりに考える力が身につけていないことに起因する。このような子どもの生育暦・保育環境等を調べると、母親が自分の『しつけ』に過度の自信を持っていたり、子どもの自主性を抑圧するような接し方(いわゆる『過干渉』)をしている場合が多い。このような子どもは、『いたずら』や『第一反抗期』もなく大人しく育てやすい。このような環境下にある子どもは、親の言うことを率直にきくことが多く、『よい子』として評価されてしまう。また、自らも大人に認められようと従順な行動をとる場合が多い。一見すると何の問題もないように見えるが、このような子どもの場合、その反動として乱暴な行動が一時的に現れることがある⁸。行動が粗暴になり乱暴な口のきき方をし、一時的に荒れる時期があるが、それを過ぎると自主性が急速に発達し積極的な子どもに変わるこ

とがある。

ここでは、自己主張に基づく『けんか』が子どもの自主性の発達にとってきわめて重要な要素であることを強調しておきたい。

(2) いたずらについて

子どもの自発性は、這い這いなどの身体の移動が顕著になる頃からはっきりと現れる。生後一年以降に盛んになる『いたずら』は、まさに自発性の現れであり児童心理学では「探索行動に基づく行動」と呼んで重要視されている。この探索行動（『いたずら』）は、3歳以降友人関係が成立すると友だちと共に実現し始める。自分でいたずらするよりも複雑さが加わり、楽しくなっていくのである。『いたずら』は、一般に悪い行為として捉えられている。そのためのしつけを厳しくしようとするのはよくない。保育者にとっては、この『いたずら』をどこまで許容するかが大きな問題となってくる。『いたずら』をすることによって困る人が出てくることを、子どもに理解させることが必要となってくる。

(3) 反抗期について

2歳頃から『第一反抗期』が始まるようになり、大人の要求に対して「イヤ」ということばを使い、自分の気持ちを主張するようになる。そして、抑制（我慢）することを知らないため他の子どもが持っているものをほしいと思えばそれを強く主張し、何かしたいと思いつくとそれを留まらせることは困難である。幼児にとって、自己の欲求を阻止された時の葛藤や、他人からの干渉に耐えることは困難なことである。

いたずら・けんか・反抗期を経験しない子どもは自発性が発達せず、抑制が強く働き友だちができにくい。このような子どもたちが思春期にさしかかると、相手に対する思いやりの心が未成熟なため挫折しやすい傾向がある。自分の主張をしっかり持ち、他の人の話も聞くことができ、他人を思いやる優しさがあり、善悪を自分で判断する、そして自分の意思で相手をも理解し、行動できる子どもに育ててほしい。

4. 子どもの遊びと社会性

子どものもつ諸機能の発達にとって、『遊び』は極めて大切な意味を持っている。運動機能・知的機能・情緒・ことば・社会性に加え、集中力・忍耐力・挑戦心や冒険心・自信など精神的側面も育てる。すなわち、子どもは『遊び』に没頭する中で人間性を磨きトータルな機能を身につけていくのである⁹。

フレーベルは、近代的な教育・保育の考え方が成熟してくる過程で『遊び』の中に教育学的意義を見出した。その著書『人間の教育』の中で、「遊びは喜びや自由や自己内外の平安や世界との和合を生み出すのである。あらゆる善の源泉は遊びの中にあるし、また遊びから生じてくる。力一杯に自発的に黙々と忍耐強く遊ぶ子どもは、必ず逞しい忍耐強い、他人の幸福と自分

の幸福のために献身的につくすような人間になる。」と述べている¹⁰。このように遊びを通じて、子どもは自己主張・自己抑制を学んでいくものなのである。具体的には、乳幼児期の手足を動かす・手をたたくなどの感覚遊びから、年齢が進むにつれて運動機能の発達に伴い運動的な遊びに興味を持つようになり、活動的な遊びへと移行していくのである。子どもの遊びは、大抵は相手を求め共に遊ぶいわゆる『協同遊び』である。友だちと一緒に楽しく遊ぶためには、ルールを守り協力していくことが大切であることの必要性に気づく。4・5歳になると仲間とのつながりも深くなり、いざこざや諍い・衝突などのトラブルも発生してくる。自分がしたいことが阻止されたり、うまくいかなかったりして悔しさや辛さを体験する。時には気分が高揚したり夢中になったりすると自分を抑えられなくなり、周囲に対し横暴な態度をとる場合もある。このように、子どもたちは仲間と遊ぶ中で対人関係の基本的あり方を学んでいく¹¹。そんな時、親・保育者は子どもに共感し励ましたり、なだめたりしてその場の気持ちを抑えてやる必要がある。それによって子どもは我慢することを覚え、相手にも自分と同じような心があることに気づき、自分を抑制できるようになっていく。したがって、周囲の大人がやみくもに子どもの横暴さを批判的に見るのではなく、共感的態度で子どもに接することが大切なのである。

このように、『遊び』は人間関係における自己主張・自己抑制の必要性や限界を体得する重要な体験であるとともに、社会的な規範を身につける場でもある。

5. 思いやりについて

『思いやり』とは、「相手のためになる」「見返りが目的ではない」「何らかの損失を伴う」「自発的である」という四条件を満たした行動である。これは、第43回東海保健学会特別講演講師であった二宮克美氏（愛知学院大学情報社会政策学部教授）のことばである。『思いやりのある子』の特徴は、活発で、社会的で社会スキルに優れており、ある程度自己主張的で自己効力感が高く、役割取得や道徳的判断の点で進んだ段階にあり、他人に同情を示すことが多いという。『思いやりのある子』の親の特徴は、『思いやり』の行動の規範であると同時に、他人についての思いやりがどんな効果を持つかを子どもと話し合うことが多いといわれる¹²。

他人への思いやりを重視し、子どもに身につけさせたいこととして『他人への心配り』が上げられて久しい。しかし、少子時代に育てられた子どもたちのこころの教育は、人格形成をすすめる上での様々な課題を抱えている。最近の調査で、日本の子供たちの思いやり意識が、国際的に見て非常に低いことが判明した¹³。社会心理学及び犯罪心理学の分析によれば、犯罪及び非行は自制心や忍耐力の欠如、思いやり意識の希薄化に起因することが多い。人格形成の基盤となる幼児期のこころの教育が『規範意識の低下』や『家庭教育力の低下』などに指摘されているように、最も重要なことであるにもかかわらず、欠如していることが大きな要因となっているのである。

物質豊かな社会の中でわれわれが見失ってきた『こころの大切さ』『思いやりの深い子どもを育てる』ことの意義を、親・保育者をはじめとする子どもをとりまく周囲の大人は、改めて真

剣に受け止めなければならない。

6. しつけについて

人間にとって最も大切なことは、自分で判断し困難を克服し、正しく生きることである。そのために、親は子どもに自立性を持たせ、物事を正しく判断し行動する力を身につけるための手立て、いわゆる『しつけ』について改めて考えなければならない。

『しつけ』には、「教えること」と「育てること」の2つの要素がある。ルソーは、その著書『エミール』の中で、子どもの本性を善とみなし人間本来の内なるものを引き出すことを教育と考えた¹⁴。しかし、現代社会においては、『引き出す』というより『押し付け』が『教育』あるいは『しつけ』と考えられがちである。成長過程にある子どもには、人間として生活していく力も知識もない。したがって、親は子どもの成長過程にあわせてこれらの知識・習慣を教えていかなければならない。人間として生活していく上で必要なことや、人として必ずもっていなければならない基本的な生活習慣から始めていくことが大切である。

佐々木正美は『しつけ』の時期にある幼児期は、「こうしなければならない」を繰り返し伝えることが大事だという。ただし、決して押し付けてはならず、それがいつできるかは子どもたちに任せることが重要であると述べている¹⁵。しかし、現実には「〇〇してはいけない」という親たちの禁止・命令は非常に多い。このことは、しつけのためにはある意味で重要なことであるが、ここで重要なのは「何故するのか」「何故してはいけないのか」を教え、理解させることである¹⁶。子どもは「ほめて育てる」と言われているが、基本的な生活習慣を身につけさせたい時に、ダメなところを叱って直そうとするよりも、少しでも上手にできた部分をほめながら教えていくことのほうが効果的である。筆者が以前看護学生の指導にあたっていた時、「して見せて、言うて聞かせてさせてみて、ほめてやらねば人は動かじ」という山本五十六の言葉を教訓としていた。子どもを育てて、しつけていくためにも同じ事が言える。親は子どもに対して『ほめる』『叱る』のメリハリがなくなると、子どもは善悪の判断がつかなくなり、結果として『しつけ』は身につかない。その結果として、自己主張も弱く、自分が他人に迷惑をかけていることにも気付かなくなり、自己抑制のきかない子どもに育っていくことになりがちである。

7. 自発性の発達と反抗

平井は、「子どもの遊びに自由が必要であることは、その遊びの中で自主性が発達していることが確認できる。創造性の芽生えに感動するからである。幼児のさまざまな活動の中に創造性の芽生えがみられるが、保育とか教育とかの名目のもとに抑圧を受け、だんだん踏みにじられて、ついに創造性のない人間にされてしまうことを創造性の研究者たちは指摘している」という¹⁷。創造性とは、これまでにない発想に基づいてユニークで新しいものを生み出す力である。それは、自分で考えて問題を発見し、他人に頼らず行動する力、即ち自主性の発達である。自主性の発達している子どもは、親や保育者に強制されたり命令されたりした時は、自己主張を

したり反発や反抗をすることが多い。自主性について理解できない親・保育者は自己主張をわがままと受け取り、結果として反抗すると『悪い子』として捉えてしまう。親や保育者は、子どもたちの自主性に対し必要以上に圧力をかけていないだろうか。しかし、現実には親・保育者から言われたことは何でも「ハイ」と言って従うのが当たり前のようになっている。これでは子どもの自主性は育たない。このことを親・保育者はよく考え、反省しなければならない。

8. 自己主張・自己抑制・攻撃性

「他人に迷惑をかけない子どもに育てる」という日本の伝統的なしつけの基本が急速に失われつつある。地域社会において無秩序な状況が増加している。このことは、家庭での子どもに社会のルールをしつける機能が低下していることに原因がある。他に考えられることとして、我慢を美德とし、自己主張する場面でも自己抑制し、抑制しなくてもよい場面でも抑制するという日本人の伝統的な対人行動のパターンが今、限界にきているのではないか¹⁸。

社会構造の多様化に伴い、ライフスタイルが大きく変容している時代にあって、言いたいことがあっても自分に不利なことがあっても、自分さえ我慢すれば済むという対人行動が、現在のライフスタイルに合わなくなってきたのではないか。抑圧された状況が続き、その結果、攻撃的な態度につながる『いきなり型非行』がその典型である。青少年犯罪者を知る多くの人々は、「大人しい目立たない子ども」だったとか、「あの子に限って、信じられない」などと驚き、それが原因で人間不信に陥るケースもしばしばである。『抑圧』『抑制』で蓄積した不満を爆発させ、抑えていたものを激しい感情と攻撃的な言動として一気に吐き出すこととなるのではないか。あいまいな自己表現が欲求不満を高め、それが弱いものいじめや意地悪することにつながるのではないか。

対人関係において常に自己抑制的に行動することが望ましいことは言うまでもない。効果的な自己主張によって、相手の立場を尊重し表現する工夫をすることが重要である。そのためには、前述のように主張力と抑制力をバランスよく育てていくことが重要である。

9. 考 察

周知のように、日本人は対人関係において自己主張することについて真理的な抵抗をもち、それをタブー視する傾向が強かった。逆に、人に迷惑をかけないようにする、人に気を遣い遠慮する、人のために我慢する、ルールを守る、目上の人に対し従順であることなどの自己抑制は、わが国の文化・社会の中で伝統的に重んじられてきた。時代の変容・世代交代と共に対人関係における考え方も変化しつつあるが、人間にとって自らの意思・気持などを表現することが大切であることに変わりない。子どもの時期からこれらの態度を養うことの重要性について、親・保育者たちはもっと自覚しなければならない。

子どもは、集団生活においても、家庭においても自分の意見を相手に伝えることにより、自己が相手に受け入れられていくことで自信をもち、積極的に自己表現ができる子どもに育て

いく。逆に自己表現を周囲から否定されることが度重なれば、子どもはおのずと自分を抑制するようになる。人格形成の柱は、子ども時代の自己主張・自己抑制にあり、「三つ子の魂百まで」とは、まさに乳幼児期的人格形成期における親・保育者の関わり方の大切さを表した言葉なのである。

親の干渉・支配が強く働き、いたずらに圧力を加えるだけの育て方によって、子どもの意欲・創造性の芽を摘んでしまうこととなる。その結果、いわゆる『三無主義』と呼ばれる「無気力」「無関心」「無感動」な子どもになる可能性が高い。また、自己抑制力が育たないと自己中心的な子どもとなり、結果として家庭内暴力・不登校などの問題行動につながる可能性がある。したがって、幼児期から子どもの健全な社会性を育てるためには、自己主張・自己抑制の二つをバランスよく発達させることが重要である。頻発する青少年の犯罪・いじめがエスカレートした重大事件・家庭内暴力・校内暴力など青少年をめぐる事件が頻発している今、子どもの自己主張・自己抑制のバランスが取れた教育を根本から考え直す時期にさしかかっている。

10. まとめ

子どもの『自己主張』『自己抑制』について文献を中心に考察してきた。その結果、乳幼児期における『自己主張』『自己抑制』は密接な関係を持って育まれることがわかった。両者をバランスよく育むことが、個人の将来における人格形成に重要な要素であることは言うまでもない。干渉でも放任でもない、「手を貸さず、目を離さず」という子育ての鉄則に従い、乳幼児期の発達段階の特性を踏まえた正しい認識を基盤とした、親・保育者の関わり的重要性をここで改めて指摘しておきたい。

- ① 善悪の判断を教え込む。子どもの『自己主張』『自己抑制』をバランスよく発達させつつ善悪の判断できるようにする。
- ② 目標を持たせること。子どもができることの目標を持たせ、その達成に向って自らが努力しようとする雰囲気をつくりあげる。こうしたいと思うことを温かく見守り、目標に向かう姿勢を育むこと。
- ③ 感謝の気持ちを教えること。「ありがとう」「ごめんなさい」という言葉を自然に発することができるよう引き出していく教育が必要である。

当たり前のことが当たり前できるように根気よく教え込むこと。親という字は「木の上に立って見る」と書く。このように、親・保育者は、子どもをいつも高い所から少し距離を置いて「そっと見守る」存在でありたいものである。その距離が本テーマの中心であり、『自己主張』『自己抑制』を育む根幹であると考ええる。

(註・参考文献)

- 1 平成13年度から始まっている。厚生労働省パートタイム労働研究会の協議事項「制度導入に向けた具体策
- 2 D.カーネギー『人を動かす』創元者 1999 p.33
- 3 山本七平『論語の読み方』祥伝社 1995 p.3
- 4 福澤諭吉『学問ノススメ』三笠書房 2001 p.169-p.172
- 5 『幼稚園教育要領』1989 文部省告示第23号
- 6 秋山和夫『保育内容総論』北大路書房 1999 p.95-p.96
- 7 杉本真理子『発達段階』中央法規出版 1988
- 8 平井信義『保育者のために』新曜社 1997 p.38-p.39
- 9 平山宗宏『小児保健』日本小児医事出版 1997 p.203
- 10 フレーベル(訳:荒井武)『人間の教育』岩波書店 1985
- 11 土山忠子他『新版現代保育原理』建帛社 1997 p.59
- 12 平井信義『思いやりのある子の育て方』PHP文庫 1989 p.73-p.82
- 13 東洋大学 中里至正教授らの研究。平成13年5月5日産経新聞朝刊に掲載。
- 14 ルソー(訳:今野一雄)『エミール』岩波書店 1987
- 15 佐々木正美『子どもの眼差し』三笠書房 2001 p.169-p.173
- 16 依田 明『少子時代の子どもたち-望ましい家庭教育を探る-』ブレーン出版 1997 p.169-p.170
- 17 平井信義『保育者のために』新曜社 1997 p.49-p.50
- 18 佐藤淑子『イギリスのいい子・日本のいい子-自己主張とがまんの教育学-』中央公論社 2001